

金賞

憧れの保全ガール

株式会社デンソー 大安製作所

大橋りさ

「手の位置は大丈夫？ タイミングよく持ち上げないと危ないよ！」と先輩の声。今日も私は作業服の油汚れを気にすることなく、重さ 35 キロほどあるポンプを先輩保全員と交換しているところです。今では、先輩たちに付いて何とか業務をこなせるようになってきましたが、製造部初の女性保全員として保全留学が決まるまでは” 保全作業は男性が行うもの” と思っていました。正確にいうと保全への憧れを押し殺すために、自分にずっとそう言い聞かせていたのです。

保全留学が始まったのは、昨年 6 月。女性の私が本当に保全でやっていけるの？ 何度も不安な気持ちに押し潰されそうになりましたが、その気持ちとは裏腹に憧れの保全で仕事ができるうれしさと期待の方が勝っていたようにも思えます。今では、不安だったあの気持ちは” 何処に行ったの？” と疑うくらい、毎日が新鮮で楽しい保全生活を送っています。

7 年前入社した頃の私は、生産課のオペレータとして、ごく普通に会社生活を送っていければと思っていました。ある日、いつもどおり操作していたのに設備が動かなくなっていました。『何で？ でも設備が故障したときはいつものようにリーダーか班長が直してくれる！』と思い、不具合をリーダーに報告。ところが、30 分経っても原因すら掴めず、直る兆しも見えない状態が続き、仕方なくリーダーは保全に連絡。現場に来た保全員は、アッという間に原因を見つけて修理してくれたのです。テキパキと作業をする保全員の姿を見たとき、『保全って凄いなあ、かっこいい』と保全への憧れの感情を抱き『自分も、もっと設備のことを覚えたい、知りたい』と私の中で変化し始めた切っ掛けでした。

その後は業務の合間を縫って設備のことを少しでも知ろうと設備教育を積極的に受講し、疑問に感じたことはリーダーや班長に質問して、自分の知識を高めていきました。その甲斐あって、少しずつではありますが、担当ラインの設備総合効率向上活動や不良低減活動を任せられ、それがうれしくて『もっと自分でできることを増やしたい』と強く思うようになりました。そうした中、私

が担当するラインでは慢性不良に大変困っていました。それは、硬くて脆いガラス細工のようなセラミック材の製品が、搬送時に欠けてしまう不良です。設備知識を高めた私は、設備構造から搬送時に製品を掴むロボットのハンド形状を見直し、今以上に製品を優しく掴むようにすれば、この課題を解決できるのではないかと考えました。しかし、私には設計の知識がなくどのようにしたら良いのか分かりません。そこで、保全からアドバイスを受けながら、何度も図面を書き直し、作っては修正を繰り返し理想のハンドを完成させることができ、職場の課題であった不良を低減することができました。このとき私は今までに感じたことのない達成感と充実感を感じ“雲の上の存在であった保全員”になることを実現させたいという想いが強くなっていきました。しかし、この時は前例のない『女性初の保全員になりたい！』という勇気もなく、その後も今までと変わらず生産の傍ら保全活動に取り組んでいました。

もどかしい気持ちのまま年月が経ったある日、保全留学募集の情報を耳にしました。それを聞いた瞬間、今まで押し殺していた感情を抑えることができず、チャンスは今だ！ と思い「レベルアップしたいので保全留学させてください」と上司に訴えたところ、「女性保全員は今まで居ないぞ！ 大丈夫か？」と大変心配してくれましたが、私の意志は強く「大丈夫です！ 色々工夫すれば、女性でも何だってできるということを私が証明して見せます」と強く押し切り、最終的に上司も「やるからには一人前の保全員になるまで帰ってくるなよ」と背中を力いっぱい押してくれました。こうして、憧れを実現に向け、進み始めた私の新たな目標は、後輩たちの憧れの的となり『私たちも保全ガールになりたい！』と言われるよう新たな道を切り開いていきます。